別府大学史学科創立三〇周年記念事業

今回の秋季大会は、史学科創立三〇周年という記念すべきときにあたり、共通テーマ「石の文化」を設定、史学科専任教員五名による研究発表会となった。尚、来年、史学科三〇周年を記念して、別府大学主催の学際的のシンポジウムを計画しているが、その主旨を次に掲げる。

本年別府大学史学科は創設以来三〇年を迎える。振り返ってみると、開設以来その研究の中心にあったテーマは石器や石塔や石仏など「石の文化」に関するものであり、このことで内に外に高い評価を得ている。大分県は、もともと国東の石仏・石塔・臼杵の石仏など日本一の石の文化と歴史をもった県である。大分の石の文化は、遠くシルクロードから中国や朝鮮、東南アジアの石の文化に繋がり、また、人類の歴史にも「石の文化」は普遍的なテーマとして存在している。この度史学科開設三〇周年にあたり、このような大分にふさわしく、別府大学の歴史にもふさわしいテーマを選ぶことによって、この三〇年を総括し、広く学界や地域社会に貢献したいと考える。

初年度（平成五年）行事

史学科三〇周年記念事業の初年度は、一一月二七日(土)午後一時より、別府大学私学研究会秋季大会として、本学三号館地下ホールにおいて行われた。演題及び発表者は以下のとおりである。

テーマ　**「石の文化　～石でつくられるもの～」**

石との対応の文化史　―「無言の石」の語るもの―　後藤重巳（本学助教授）
石器と人類の出会い　―人類史における石器の位置―　橋　昌信（本学教授）
国東塔の成立　―モンゴル襲来と妙法経信仰―　飯沼賢治（本学助教授）
ローマの水道橋　―ガールの水道橋を中心に―　山本晴樹（本学助教授）
石仏の材質と保存　―主として大分県下の磨崖仏について―　村上允昭（本学教授）

発表終了後、発表者全員と聴講者による質疑応答および全体討論が行われた。特に、興味深かったものは、学生からの質問が相次いだことで、普段の授業とは違う雰囲気に教員もやや緊張を強いられていた。

来年度は、外部からの講師を交えた左記のシンポジウムを予定している。

二年度（平成六年）行事（予定）

時期　九月一〇日(土)・一一日(日)

内容　石の文化〜世界史的視野から見た大分の磨崖仏〜

一日目（一三：〇〇〜一六：四〇）　会場　臼杵市民会館（予定）

開会挨拶　別府大学学長　西村駿一　ほか

公開講演（各一時間）

長澤和俊（早稲田大学教授）「シルクロードの石の文化」

西川杏太郎（東京国立文化財研究所所長）「臼杵の磨崖仏を中心として」

石澤良昭（上智大学教授）「東南アジアの石の文化」

二日目（一〇：〇〇〜一六：四〇）　会場　大分農業会館（予定）

臼杵の磨崖仏と大分の石の文化

═══ 午前の部（一〇：〇〇〜一二：〇〇）═══

開会挨拶　別府大学教授　賀川光夫

問題提起

飯沼賢司（別府大学助教授）　歴史学の視点から

菊竹淳一（九州大学助教授）　美術史の視点から

賀川光夫（別府大学教授）　保存の視点から

午後の部（一三：〇〇～一六：三〇）

問題提起

菊田　徹（臼杵市教育委員会文化財係長）　地元担当者の視点から

パネルディスカッション　「大分の石の文化～磨崖仏の過去と未来～」

コーディネーター

後藤宗俊（別府大学教授）

パネリスト

石澤良昭（上智大学教授）

菊竹淳一（九州大学助教授）

菊田　徹（臼杵市教育委員会文化財係長）

渡辺文雄（県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館主幹研究員）

山田拓伸（県立宇佐風土記の丘歴史民族資料館主任研究員）

仲嶺真信（別府大学助教授）

飯沼賢司（別府大学助教授）

総括

後藤重巳（別府大学教授）